



TITLE:

<巻頭言> 時間の使い方の今昔

AUTHOR(S):

木村, 磐根

---

CITATION:

木村, 磐根. <巻頭言> 時間の使い方の今昔. Cue 2006, 16: 1-2

ISSUE DATE:

2006-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/57903>

RIGHT:

## 巻頭言

# 時間の使い方の今昔

昭和30年卒 名誉教授 木村 磐根



私の卒業研究は50年あまりも前のことである。その頃には計算といえば計算尺かタイガー計算機程度、コピー機もなく、卒業論文は勿論自筆であり、原稿の段階で十分推敲して清書をする必要があった。図面は烏口を使って手描きであり、卒論提出日の直前には図面作成に2晩徹夜をした記憶がある。今の学生には高速の計算機があり、研究のための計算も勿論超高速に行われる。論文の原稿は計算機のワープロ機能を使うと簡単に推敲もできる。またLATEXなどを使うと活版印刷したような綺麗な原稿が完成する。図面も計算機で意のままに作図できる。学生一人が学部卒業あるいは修士課程修了までに研究に使う時間の昔と今の比を考えると、おそらく何十分の一かに減っていることになる。このように時間の使い方の効率が良くなったので、現在の学生にとって残りの時間がどのように有効に使われているのだろうか気になるところである。

私が京大を10年前に定年で退職してから9年間お世話になっていた私立大学でも多人数の卒業研究、修士課程学生の研究指導を担当してきた。その対象になった学生の範囲だけでみても、大部分の学生は4年生に関しては、就職が決まってからも、後のほとんどの時間をアルバイトに当てていたように思えた。自分の時間の使い方の優先度はクラブ活動なども稀にはいたが、まずはアルバイトであり、勉学や卒業研究のために使う時間の順位は最後の方である。勿論アルバイトにも価値のあるものもあるだろう。ただ大昔のように学資のために苦学する学生は少ないし、大学時代に何を身に付けるべきかをちゃんと考えている学生も意外に少ないように思われた。従って昔苦労した時代の時間が、コンピュータのお蔭で節約できた分、無為(?)なアルバイトなどに回っている人が多いのではないかという印象が強い。

先述のように昔は一見効率の大変悪い勉学と研究を行っていたことになるが、時間の流れも今よりずっと遅く感じ、結構ゆっくり考える時間的余裕があった様に思う。

一方研究者にとっても分野にもよるが、計算機を道具として活用できる研究は進捗も早いのではないだろうか。ただ国立大学の先生方にお聞きすると、大学が法人化になってからは、研究費を自ら獲得したり、その後の評価のための資料作成などに使う時間が昔と比べて大幅に増加したそうである。良し悪しは別にしてこれも時間の使い方の大きな変化である。

私は昨年3月に第2の就職先も退職し、自由度の大きい身分になった。お蔭で新しい発見などもある。例えば昼間にテレビを見る機会もしばしば出来た。午後早々に、ある放送局に「スタジオパークからこんにちは」と言う番組があり、毎回芸能人や有名な科学者など一人をゲストに招き、男女二人のアナウンサーが対談しながら過去からのエピソードや、現在までの経緯・動機などを紹介する番組である。それらの人々の生き様を見ると、動機は人により大いに異なるが、若いときの大変な苦労と努力は共通している。大阪工大在職中、船井電機株式会社船井哲良社長の学生向けの講演をお聴きする機会があった。若い頃大変な苦労をなさって今の大会社を作られた方である。お話の中で特に若い人に「偉人や成功した人の伝記を読みなさい」というアドバイスがあった。偉人や成功した人は苦労をした人が多いから参考になることが多い。学生諸君には時間の有効利用としてお勧めしたい。

IT社会でいろいろな面で時間の使い方の効率が昔に比べて格段に上がったことは先述したが、今後の社会ではその環境が当たり前であり、その傾向が助長されてゆく。その意味では各自が自由に使える時間が増えていっている筈である。一方趣味や、学ぶ内容が昔に比べて圧倒的に多彩になり、そのようなところにも時間を有効に使って創造性豊かな人生を送るという、新しい時間の使い方が可能となった。要は時間をどの様に有効に使うかがその人の将来の豊かな生き方とも結びつくのであろう。